

## 存在と知性

松 井 吉 康

エックハルトのラテン語著作の根本命題は、「存在は神である」という命題であるが、それは、一方ではトマス（トマス・アクィナス）の「神は存在である」と或る意味では同じ事を語っている。つまり神の絶対的、必然的存在を意味する「存在の否定の否定」を語っているのである。ところが他方では、全くトマスと違い、存在と神の端的な同一視を意味する。つまりそれは、あらゆる存在と神の同一性を示すのである。エックハルトは、創造と神自身の存在の成立の同時性すら語っている。（彼は「世界の存在する以前には神も存在しなかった」と言う。）以下の発表の主題は、この両方の整合的解釈を通してエックハルトにおける存在と知性の関係を考察する事にある。先ず問題とすべきは、彼がそもそも神の存在の成立という事をどのように理解していたか、である。ラテン語著作の大きな問題の一つに「神において存在と知性の関係をどう見るか」という問題があるが、それに対して彼は、はっきりと「神の本性は知性であり、神自身にとって存在するという事は、知性認識するという事である」と言っている。即ち知性認識する事によって、神は神なのである。そしてその知性が、存在の場所なのである。しかもそれは被造物の存在の場所に留まらず、神自身の存在の成立の場所なのである。神の存在とは、神の自覚、神の「私」の成立の事なのである。それゆえ「神が存在しない」とは、神の「私」が成立していないという事である。ドイツ語説教の「根底における

神の非存在」も実は、存在の欠如を意味するのではなく、神においても、その自覚の構造においては、その自己が成立していない場所がある、という事を意味していたのである。その場所が、場所としての知性（知性の豊かさ）である。それゆえ冒頭の矛盾に対する解答は、永遠に自覚が成立していても、その場所そのものは、その自覚からは把握されない、という事なのである。では何ゆえに神の自覚存在と世界の存在即ち創造の同時性が語られ得るのか。

創造とは、端的に存在を巡る事態である。それは、存在を与える事なのである。ところが存在の成立は、神自身の内で成立する。神の永遠なる自覚の内に万物の存在も成立するのである。これが意味するのは、「神が総てである」という事であり、被造物は無であるという事なのである。神は自らの存在と別な事として世界を創造するのではない。かくして被造物の存在にせよそれが存在である限り、その存在は神に属するのである。（これは、エックハルトのいわゆる「帰属のアナログア」論においてははっきりと見て取られる。）しかし神の内ではいかなる存在も永遠である。そしてこの存在を永遠なるものとして把握する能力が知性なのである。エックハルトの論じる存在とは、殆どと言って良いほど永遠なる存在のことなのである。それゆえ存在と知性は、相関概念であり、知性の対象は存在である。勿論ここで言う知性は、普通の知性と同じではない。彼は、二つの知性を論じている。即ち時空の抽象能力としての知性と対象を神において認識する能力としての知性である。後者は、それ自身神的でなければならぬ。ラテン語著作で展開される存在論や神論も、実はこの後者の、神の知性と交差する我々の知性に支えられているのである。そして実は、

この様な知性論は、ドイツ語説教での知性と存在の關係と一致するのである。

ドイツ語説教に見られる知性論をまとめると次の様になるう。我々の知性は、我々自身が自己を放下すること、その被造的性を脱却し、その本来の豊かさを開示することで、それ自身が神的(魂の火花)になる。(この知性の豊かさというのが、有名な「根底」)。我々は自己自身を完全に放下して、いかなる物にも限定されない自覚の根底を開示する事で、その根底において成立する万物の存在の成立を自己自身の存在の成立と一つの事態として自覚する。ここにおいて知性は、神すらも含めた万物の存在の成立の原因となる。こうした連関が、「魂における神の子の誕生」と言われた事態なのである。それゆえラテン語著作の知性論が先にあって、ドイツ語説教の思想を導き出したというべきではない。それはラテン語ドイツ語の区別なく、エックハルト自身にとつて、リアリティーのある知性についての議論なのである。しかし知性については、ラテン語著作よりもドイツ語説教の方が、それがいかなるものであるかを明らかにする材料は多い。エックハルトの考えている知性を理解する為には、知性について表明的に語られている文脈を考察するだけでは十分ではなく、「魂における神の子の誕生」という事態そのものの考察が必要となるのである。

エックハルトの存在論は、知性論によって支えられており、それゆえに彼が存在について語る際には、常にその背後に神的な知性が働いている。彼のドイツ語説教が、神の存在と被告物の無という対極的な存在論的構造から、神認識或いは、我々自身の永遠なる存在を語り得る地平へと移行することが可能なもの、その存在のリアリティーを神的な知性が存在論的に支えているからなの

である。「存在論的に」というのは、知性認識が存在の根拠だからである。この様なことが言えるのも、その知性が一般的な意味での知性ではなく、神的な知性だからである。エックハルトの思想は、こうした存在論的な地平から知性を巡る地平への問題地平の移行をその基礎に置いている。彼の思想はそれゆえ彼の知性論の解明を抜きにしては語り得ない。我々は、彼の知性論をラテン語著作ドイツ語著作の別なく、既に見たような視点から明らかにした時初めて、彼の存在論や神論について総合的に論ずることが出来るようになるのである。